

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 133 号

平成 25 年 5 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（12）

主の御名を呼び求めるものは、すべて救われる

〔ロマ書 10 章〕9 節には「すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる」とあります。これでキリスト教は完成しています。それを 13 節で言えば、「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」となる。口では、「我が贖い主はイエスなり」と告白し、心では、自分はこの贖いによって復活させて頂くと思う。これを一言で言えば、この 13 節「主の御名を呼び求める者はすべて救われる」となります。この「救われる」という意味をはっきりと知る必要があります。この「救われる」というのは、「死ねば天国に往って、キリスト再臨の時に復活して、イエス・キリストと同じ復活体を頂く」ということです。これを救われると言う。

（P.342）

主の御名を呼ぶくびきは易い

イエスは、「我がくびきは易く、我が荷は軽い」(マタイ伝 11 章 30 節)と仰せになりました。すなわち、我々にとって「我が主イエスよ」と主の名を呼ぶこのくびきは易いということです。また、イエスが我々に与え給う日々の仕事は、我々に与えて下さるイエスの荷であります。この荷は軽い。我々このくびきを忠実に担う時に、諸君、人生において恐るべきものがありますか！

この 10 章は、信仰の落第生に信仰を説明した箇所であります。パウロは、落第生にでもよく分かるように信仰を説明した。ですから、我々のような落第生はこれで往けばよい。...

口で「我が主イエスよ」と言うことがいかに重要であるか。自分は復活すると心で思っても、心というものはいつも動いています。少し悲しいことに遭遇すると心は動揺します。少し憎み合えば、心は動きます。仏の生まれ変わりとまで言われた法然上人でさえも、「人の心 池の水に似たるかな にごりすむこと はてしなければ」

と詠まれました。あのような仏様に近い人、それほど偉い人でも、心は常に動いていると言う。我々の心の状態などは当てになりません！ 頼りになるのは「我が主イエスよ」と言うこと、すなわち「称名」です。行ずるということは実に大事です。何を行なうかによって、その人の未来が決まる。これは本当であります。

内村先生は、この第 10 章の講義で法然上人の『撰択集』をお挙げになって、これは信仰を証明する大著であると言われました。確か

に、この『撰択集』は信仰の書であります。私は、これは行^{ぎょう}を書いた書であると思います。法然上人は、易行道とは言われたが、無行道とは仰せにならなかった。易しいけれども、行は必要不可欠です。この『撰択集』を読んで見て下さい。内村先生は、これを信仰の書であると仰せになりましたが、これは易行を教える書です。同

様に、ロマ書も、信仰を教える書であると同時に、主の名を呼ぶ行を教える書であります。(P.344)

心は動く、頼りになるのは行

実際、行ないの問題を解決するのは信仰です。しかし、信仰の問題を解決するのは神から来たる行、妙なる行であります。私は人に信仰を勧めるよりも、神から来たる行、すなわち、主の名を呼ぶ「称名」を勧めたい。その理由は、心は常に動いているからであります。頼りになるのは行です。心は頼りになりません。

この妙なる行について、聖書には二つ書いてあります。その一つは、この 10 章 13 節にある主の名を呼ぶ行、すなわち、「我が主イエスよ」と呼ぶ行であります。もう一つは、「モーセが荒野でへびを見上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を仰ぎ見る者が、すべて永遠の命を得るためである」とイエスが言われた、あの「仰ぎ見る行」であります。これは、内村先生が実行された行です。内村先生は、「十字架の主を仰ぎ見て義とせられ、復活の主を仰ぎ見てきよめられ、再臨の主を仰ぎ見て復活する」と言われて、仰ぎ見ると言う行をおとりになりました。そして、「わが主イエスよ」と呼ぶ妙なる行は、後から来るものにお譲りになりました。

諸君！ 自分の胸に手を当てて、よく考えてみて下さい。自分の信仰はどうかと。自分の心はどうかと。神の子たるの信仰も結構。復活の望みを抱くのも結構。天国を望むのも結構であります。しかし、結構ではあるけれども、我々の心、我々の信仰は、常に動いている。その時に、我々が真に力を得て、真に我が荷を担い、我々に悲しみ、苦しみを乗り越えさせる力は、「我が主イエスよ」と呼ぶ、この妙行から来るのであります。

ロマ書 1 章 16 - 17 節はルッターをもって、13 章 11 - 14 節はオーガスチンをもって、その意義が全人類に明らかにされました。いつの日にか、10 章 9 , 10 , 13 節が、恵心僧都の名をもって、世界人類に明らかにされる日が必ず来ると、私は確信して疑いません！

(P.344)

一人の信者で日本は改まる

内村先生は、「救われたことについては、何一つ自分の方でこうしたということはない。これはひとえに神の恵みである」と言われました。私も、先生とまったく同じ感想を持ちます。私は、自分自身の過去を振り返って、私は、自分で真剣に救われようとは思わなかった。天国も、復活も求めず、望まなかった。私は、この世のものを愛しました。ところが、不思議なことに、自然に、今、こうして伝道するようになってきました。すなわち、神は、私にこの世のものをお与えにならずに、ついにやむを得ず天国を願い、永遠不滅の復活を願わざるを得ないようにお導きになった。私が救われたのは、ひとえに神の力、神のご意思です。私には、いささかの功績いさおしもありません。このような自分をかえりみますと、日本の将来についても、必ずや神がこの滅亡すべき日本民族を導いて、救いに入らしめ給うことを私は確信します。私も、日本の将来並びに世界の将来について、必ず神が救いを実現し給うと信じます。私は、自分を振り返って、そう思います。この私をさえも救いに導いて下さった神は、他の同胞を救い給わない理由はありません。

内村先生は、「日本に一人の信者が現れたら日本国は改まる」と言われました。私は、1億人もいる人間の中で一人の信者が現れたら日本の国が改まるとは、少し言い過ぎではないかと当時は思っていました。しかし、今はそうは思わない。もし一人の信者が現れたら、日本は必ず改まります。

日本の将来について、私は、大いなる希望を持ちます。また、人類の将来についても、私は、希望を持ちます。キリスト再び来たり給う時、その時に我々は栄化、復活させて頂きますけれども、その時に神が我々に賜う愛は、人の目未だ見ず、耳未だ聞かざるものです。その時我々の感慨はいかばかりであろうかと思えます。諸君も、一人一人が、他人がどうであろうとも、一人が確立すれば、日本国が

確立し、そして全人類が確立するという勇気を持って、各自、自分の与えられた職務に励んで下さい。 (P.353)

潔き、活きた供え物としてその身を献げよ

兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。(ロマ書 12 章 1 節)

〔ロマ書 12 章 1 節の〕「そういうわけで」は、文語訳では「されば」と訳してありますが、...8 章までに学んだことが分かって、我々はキリストが復活したように、我々もまた復活させて頂くという信念、希望をもっている。心では自分は復活すると思って、口ではイエスは救い主である、「我が主イエスよ」と言う。それだから「therefore」なのです。キリスト教道徳はこの上に立っています。この「されば」という字のある点が、普通の道徳と根本的に違う理由です。

〔12 章 1 節は〕これを要するに、「されば」ということと、「神の心にかなう、潔き活ける供え物としてその身を献げよ」ということ、この二つが本日の中心であります。「されば」と言うのは、我々は復活する者としてもらった、それで、「我が主イエスよ」と口で言っている、そうだから、己のが身を献げよ、と。具体的に言うなら、目の前に置かれた義務をなすこと、これがすなわち、神の心に適う潔き活ける供え物としてその身を献げることになる。この小西芳之助は、「献身」をこのように解釈します。復活すると確信することは、1 - 8 章の要約であり、「主イエスよ」と称えることは、9 - 11 章の要約であり、そして目の前におかれた義務を果たすことは、12 - 15 章の要約であります。

「意」にあらわれた恵みは復活の希望、「口」にあらわれた恵みは「我が主イエスよ」と言う称名、「身」にあらわれた恵みは目の前の義務を毎日行うこと、「Do」という行です。この三つが、神の恵みのわが身に現れた形であります。この三つの神の福音の恵みが「身口意」に現れることを書いた書物が、このロマ書であります。これは、神の贖いの恵みが我々の心と体に展開された有り様であって、この三つは「霊の賜物」であります。...神の霊が我々に臨んで、福音の霊が我々に臨んで、この三つが展開してくる。これをクリスチャンという！

(P.358)

第 48 講 キリスト教道德の第 1、謙遜

キリスト教の謙遜とは

「わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなた方ひとりびとりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである。」(ロマ書 12 章 3 節)

我々は罪深くして滅ぶべきものであったが、キリストの救い、神の恵みによって罪が赦され、神の子とせられ、永遠の命が与えられている。これはひとえに、神の恵みに依っていることを知って、自分自身の値打ちを知る。これが「思いあがるな」という意味であります。これがキリスト教信仰の基礎です。ところが、このことを誰も教えてくれない。教える先生が分かっていますから。無い袖は振れない。この教会に来られる方は、他のことはあまり知らなくともよいが、ただこのことだけ、すなわち、「万人罪人の信仰」だけを知って頂きたい。これだけを知って頂ければ、私は満足です。我々は罪人であって、滅ぶべきものである(mortal)である。これがキリスト教の初め、入門です。この土台がガッチリしていないために、我々は、いつもぐらぐらしています。堅い基礎の上に立った家は動きません。ソクラテスの「汝自身を知れ」という言葉と一致しています。

次に、積極的な面について話します。

積極的には、自分の分限を知ってそれを他人のため、神のために働かせよ、という意味であります。ここで、マタイ伝 25 章 14 - 30 節にあるタラントの話の思い出して下さい。我々は各自、タラントも違い、また仕事も違います。パウロは、「目の人もあれば耳の人もある」と言いました。我々は、目であるか、耳であるか、口であるか、手であるか、足であるか、誰もが一つのタラント、一つの仕事を持っています。自分が 3 タラントを与えられていたなら、その 3 タラントを働かせたら宜しい。目というタラントで生まれていたら、目をよく働かせて目を丈夫にしてよく見たらよろしい。それを「謙遜」と言う。日本流に、人に譲ったりすることを意味していません。自分自身の価値を知り、遠慮せずに、目なら目なりに、自分の力が三なら三の力を働かすこと、これをキリスト教では「謙遜」というのであります。(P.369)

与えられた仕事を忠実に行うことの深い意味

なぜなら、一つのからだにたくさんの肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、わたしたちも数は多いが、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互いに肢体だからである。(ロマ書 12 章 4, 5 節)

信者は、キリストにあって一体であり、有機体をなしている。例えば、目は頭の働きはできないが、見るという働きによって、体全体のために役立っている。...頭脳は、客観的に見て高い働きをしているように見えますが、手足がなければ、頭脳は働かない。ですから、手足はある意味では頭脳と同じく尊い。この原理を学ぶ必要があります。これによって、相手を尊重するという精神が分かってきます。

この有機体をなしていることが分かってくれば、謙遜という意味が分かって来ます。キリスト教の信仰においては、我々はこの 50 年あるいは 70 年の生涯が終わったならば、天国へ行って、復活して、永遠不滅の生命を頂く。皆同じものを頂く。ただ、この世における 50 年あるいは 70 年の仕事が少し違うだけであります。ある人は大工をやり、ある人は先生をやる。そして、それらは有機体をなしているために、各自が働かなくてはならない。ここに、各自が自分に与えられた仕事を忠実に行うということの深い意味が出てくるのであります。

6 節「このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし」。我々は賜物を異にしている。どちらが上で、どちらが下ということはありません。社会的秩序においては上下はありますが、その職の尊さに関しては上下はない。私は、ある意味において、むしろ下の方が難しいと思います。下の仕事を、縁の下の力持ちの仕事を本当によくやるということは、相当な忍耐を要します。人間は、下の仕事をやっている間に人物が練れてきます。上になったら誰も注意してくれませんが、縁の下の力持ちの仕事に練れていない人が、もし上になったら駄目です。鼻持ちならなくなります。

(P.370)

謙遜の意味

〔12章〕8節「勧めをする者であれば勧め、寄付する者は惜しみなく寄付し、指導する者は熱心に指導し、慈善をするものは快く慈善をすべきである。」「勧めをする者」とは、感情に訴えて教理を説明する福音師、伝道者を言うのでしょう。

以上の4つが、教会の会員ならびに求道者に対する務めです。「惜しみなく」という字の原語は、英語で言えば「simplicity」、すなわち、持てるものを分け与えるのに、何も言わずに、「単純に」寄付せよとの意味であります。「指導をする者」とは、寄付以外の善い行いを実行する人の意味です。原語では、「熱心に」ではなく、迅速に、英語で言ったら「speedy」という字です。善行は早くなせという意味でしょう。「慈善をする者」は、古い訳では、憐れみをなす者となっています。自分の財産を寄付するのではなく、寄付されたものを病人に持って行ったり、病者を慰めたりする人の意味です。簡単に言うと、善いことをするのは快くせよということです。内村先生は、「浮き立つような心持で快くなせ」と言われました。

以上、本日は「謙遜」の意味について学びました。我々の言う謙遜と、ここで説かれている謙遜とは大分違います。消極的には自分の値打を知って、積極的には自分の持ち分、三なら三のタラントを十分に働かせる。これを「謙遜」と言うことを学びました。すなわち、イエス・キリストが大工の仕事をされ、罪人という最も低い地位をお取りになったことに、深い意味があることを学びました。しかし、我々は、みな目立つことで尽くそうと願っています。人間が偉いと思うことと、神が偉いと見ることとの間には、大きな隔たりがあります。諸君！ 思い上がることなかれ！ （P.372）

第 49 講 基督教道徳の第 2、愛

讃美歌 403 番 (神によりていつくしめる) のエピソード

愛には偽りがあってはならない。悪は憎み退け、善には親しみ結び、兄弟の愛をもって互いにいつくしみ、進んで互いに尊敬しあいなさい。(ロマ書 12 章 9, 10 節)

〔10 章 9 節の「兄弟の愛をもって互いにいつくしみ」について、〕内村先生は、一つの例を挙げられました。1782 年、ジョン・フォーセット博士 (Dr. John Fawcett) という人が、英国の片田舎で教会の牧師をしていました。長年にわたって福音を説いておりましたが、学識が進み、ロンドンの有力な教会から招聘を受けました。ロンドンへ行って伝道をしようということで、教会を去ることになりました。しかし、見送りに出た村人たちは、その時、先生の村人に対する愛情があまりにこまやかであったために、先生との別れを惜しんで声をあげて泣いた。先生はこの人たちを振り切って出ていくことが出来ず、ついに、ロンドン行きを中止し、村へ帰って、終生その村のために牧師を勤められた。本日の礼拝で歌いました讃美歌 403 番は、こうした事情から作られたものであるとされています。これは信仰からくる愛であります。最近、信者の間にこのような兄弟愛というものになくなってきています。これは信仰がないためです。クリスチャンである、教会の会員であると言いながら、相互にこういう細やかな愛情がありません。贖いが分からず、復活の希望がないからです。... ついに先生はロンドンからの有力な招聘を断らざるを得なくなりました。これは昔話ですが、現代の教会にそういう牧師がいますか？ 私は一人でも二人でもよい、そういう信仰がこの教会に起きて、互いに愛し合いたい。内村先生は、「人生は数人の友人があれば足る」と言われました。「進んで互いに尊敬において遅れをとるな」とパウロは言っています。諸君、友人を尊敬したことがりますか？ 信仰なきところ尊敬はありません。キリスト者の尊敬というものは、神からくる聖霊によって起きます。聖霊の降っていない信者に尊敬はありません。贖われて神の子とせられ、永遠不滅の生命を頂いたその神の子に対して尊敬をする。...

(P. 376)

キリスト教の愛とは、称名・仰瞻・分をなすこと

このキリスト教の愛とは、神の意思を行なうことです。その第1が「主の名を呼ぶこと」であります。あるいは「主を仰ぎ見ること」（内村先生は後者をとられました）であります。このどちらでも宜しい。

第2に必要な愛は、「我が分をなすこと」であります。運転手は運転をすること、学生は勉学をし、会社員は会社の勤めをなすことです。教会へは来なくても宜しい。会社の仕事があれば、先ずそれをやり給え！ 愛の第1は「称名」、第2は「謙遜」、第3が本日学びました「愛」であります。我々の言ういわゆる「愛」というものが、いかに程度の低い行いかということに気付きます。キリスト教で「愛」、「愛」と言って、人々を愛することを最大と思っていたら、それは大きな間違いです。聖書の勉強が足りません。

本日学びましたこの「愛」は信仰から来ます。信仰なきところに「愛」は出てきません。どうぞ、二人でも三人でも宜しい、この信仰を与えられて、互いに相愛する者となるよう、切に祈ります。

(P.377)